PE095　　日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集,p.512　2007/9/16(日)　文教大学

生徒に関する不適応観による教師の分類

○宮本正一(miyamoto@gifu-u.ac.jp)・別府悦子
(岐阜大学教育学部)　　(中部学院大学)

key words: 教育相談、教師、加齢

I. 目的

中学校等の教育現場で、生徒の問題行動等へ早期に対応するためには、不適応状態を敏感に察知できる感性をもつことが重要である。児童・生徒の適応・不適応を判断するのは教師であり、教師の学級不適応観の違いが児童・生徒への評価や指導行動に差異を生じさせる可能性がある。

本研究の目的は、中学校教師の不適応観とそれに影響する要因を検討することである。

II. 方法

（1）対象　岐阜県内の中学校 17 校の、管理職から講師として勤務する教員までのすべての教員、延べ 376 名。

(2) 実施時期　2005 年３月。

(3) 手続き　各中学校の校長・又は教頭、教育相談担当等の教師を通して、全学校職員へ回答を依頼した。その後、教師個人が回答した封書を、ほぼ２週間を経て学校毎に取りまとめてもらい、郵送により回収をおこなった。

(4)質問項目　「性別」「年代」「経験年数」「校務分掌」「担任有無」、「教師の学校不適応観尺度」40 項目と「教育相談体制評価尺度」29 項目

III. 結果と考察

「教師の学級不適応観尺度」40 項目と「教育相談体制評価尺度」29 項目は因子分析の結果、ともに６因子構造と判断した。各因子毎に項目の総和を求め、項目数で割ったものを因子項目得点と呼ぶ。本報告では、これら 12 種の因子項目得点を元にクラスター分析を行い、その結果のみを報告する。

図１はクラスターの樹形図である。「授業中じっとしておれず、立ち歩く」「授業中、授業と関係ないことをして注意を受けても止めない」等の第１因子「反社会性」を「生徒の学校不適応状態と判断するとき」重要である認知する傾向は第５>第１=第４>第２>第３の順に強かった(F[4/371]=91.2, p<.0001)。

「学校ではほとんど話をしない」「一人で遊んだり作業をすることが多い」等の第２因子「非社会性」を重要である認知する傾向は第５>第４=第１>第３>第２の順に強かった(F[4/371]=84.7, p<.0001)。

「友達を中傷するような手紙を回す」「悪口を言ってグループの団結を固めようとする」等の第３因子「いじめ攻撃」を重要である認知する傾向は第５=第１=第４>第２>第３の順に強かった(F[4/371]=46.6, p<.0001)。

「宿題や提出物を期限内に出さない」「嫌いなおかずが給食に出されると体調不良を訴える」等の第３因子「無気力」を重要である認知する傾向は第５>第１=第４=第２>第３の順に強かった(F[4/371]=56.9, p<.0001)。

「あいまいな理由で学校を休む」「ちょっとしたことで相談室や保健室に頻繁に出入りする」等の第５因子「不登校傾向」を重要である認知する傾向は第５>第４=第１>第３>第２の順に強かった(F[4/371]=67.0, p<.0001)。

「遊びや学習などでグループの中心になりたがる」「一人が好きで、他人に手助けされることを嫌う」等の第６因子「性格問題因子」を重要である認知する傾向は第５>第１=第４>第２=第３の順に強かった(F[4/371]=93.4, p<.0001)。

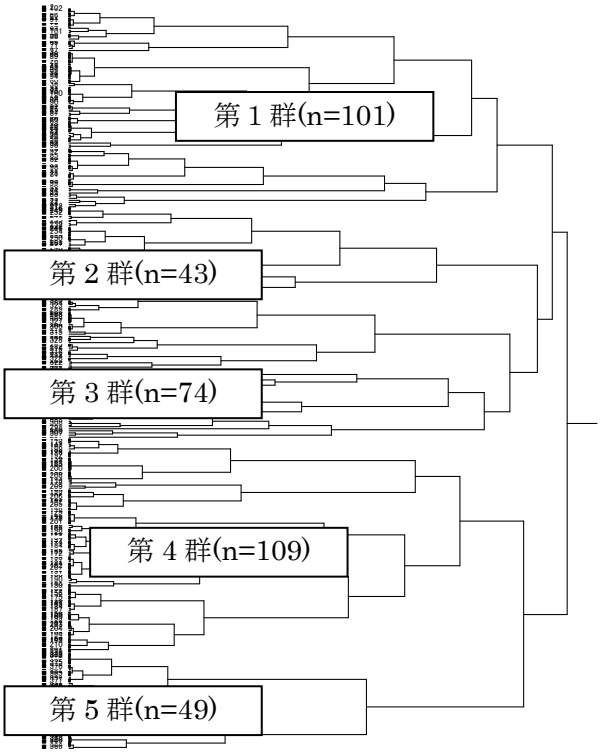

図１　教師は５つのクラスター(群)に分かれた

これらのクラスターは「性別」「年代」「経験年数」「担任有無」には無関係であった。「校務分掌」を管理職、主任クラス、一般に３分して５つのクラスターとの関係を見ると、管理職は第５クラスターに多く、一般教員は第１クラスターに多かった。

本研究は文部科学省科学研究費基盤研究(C)（課題番号 15530520；代表別府悦子）による。岐阜大学の伊藤宗親准教授、岐阜県教員の桂山順子氏も協同研究者である。

(MIYAMOTO, Masakazu & Beppu, Ethuko)